



修善寺物語

片浜 さかい みつほ

伊豆の国上狩野庄修禪寺村、開港して間もない下田へとつづく街道の、天城峠にさしかかる坂道の少し手前、辺りの山々は深まる秋の装いをみせ、楓や桂はその葉を鮮紅色に煌かせて、林床の檜や蔦、漆なども静かな風と呼応して、釣瓶落しの迫った霜月の午後をたおやかに飾っていた。

濃紺色の外套を羽織った背丈七尺はあろうかという大男が、馬を降り周囲一面の鮮やかな紅葉の美林に瞳目し呟いた。

美しい

半月前、新たに駐日領事となった陸軍大佐ゲオルギーワレンロードは長崎港停泊中のボルガ号の甲板にて、前任のペテロベクIIプチャーチンより正式な任命を受けていた。

愈々だ、ワレンロード君。あとは君の補佐役となるドージェ少佐をのせたスーズダリ号だ。明後日ここに寄港後、ただちにシモダ（下田）へ向かう。

プチャーチン総帥とワレンロードは稲佐の繁華街を散歩して過ごした。任務を終え、帰国を待つだけとなった総帥は、とりわけ明るい表情を見せていた。

二百年以上鎖国を続けるわが国と、彼らの魯西亜国とは、ラクスマンの根室来港以来、とくに悶着をかかえていた。露米会社重役レザノフによる対馬での蛮行は、彼の故国での横暴ふりを鑑みれば驚くに値しないが、今度は幕府が松前藩を通して、※クリル第二十島にて軍艦長ゴローニヤンを捕縛するという行動にでた。

その為ロシア人ばかりでなく全ての外国人が、開港前から夷狄として毛虫のように嫌われる下地ができてしまった。

そして、とどめはアメリカ国の提督マシユウIIペリイの登場だ。上喜撰にも譬えうる彼の遣り方、列強の先陣をきり、將軍の鎮座する江戸を標的に一直線に突進して

見せたのだった。

一方ロシアも英仏連合国相手に、なかなか決着のつかない戦争を続けていたが、ワレンロード大佐はバクチサライ戦での功績があり、日本の歴史と文化に精通する一面もあつたので、プチャーチン総帥が後任として推薦したのである。

全くペリイ殿は強引すぎる。亜州の民を蛮族と見下すと公言しているようなものだ。

同感です。提督はアルフレド賢王（九世紀英国七賢王のひとり）にでもなつたつもりなのでしょうか。少なくともこの国において恫喝どくわなどという方法は通用しません。

そういえば、君の愛読していたウゲツ（雨月）とかいう和書のハゴロモの一節だったか。一昨年私がシモダの近海で遭難し、沈みかけたディアナ号の中で死を覚悟したとき、はつきりと見えたのだよ。この国で霊峰と崇められるフジの麓の海岸に、美しい松の林があるのを。

ハゴロモは謡い人・不詳の能楽のひとつで、雨月物語とは関係ありません。ですが遙か彼方の松林が確かに見えたとおっしゃるのでしたら、総帥をお救い下さつたのは天女スレニということになりますね。

船を失くした吾らの為に、ヘダ（戸田）の人たちは代用船を建造してくれたのだ。君の言う通り、神に選ば

れし民の住まう国であつたよ。

いづれにせよ、この国の人達は勤勉実直で典雅風流を好む人たちなのです。そう念頭において付き合つて行くべきと思います。

プチャーチンは力強く領いた。

頼んだぞ、ワレンロード君、君のことは常々イエルク首長（シビル汗国を破りロシア領土を拡大したコザック首長）の再来と称してきたのだ。だが本当にシモダまで陸路を進むのか。大シベリアを走り回つた君にして見れば、さして広大ともいえぬこの国の移動ということなのだろうが、何より君ほどの巨漢をのせる馬が見つかるかが心配だ。

私でしたら対州馬（対馬原産の野生馬）であろうと、小型の驢馬や騾馬であろうと、大抵の馬は乗りこなしてみせます。

谷間の向こうから修禅寺の梵鐘が乾いた風につて響いてきた。それまで温和しく吹いていた風が葉音をざわめかせると、小さな渦を巻いては馬のたてがみを逆撫でた。

はや木立は振り落としゆく

その裸の枝々から 最後の葉たちを

秋の冷氣があたりにみち 道が凍てつく

妙な懐かしさとともに晩秋らしい光景に満足したワレンロードは再び手綱を執ると、鐘の音の聴こえてきた谷へと疾駆していった。

修禪寺村は桂川沿いに薬湯が湧き、各所に源氏三代にまつわる言い伝えが残っている。湯治の宿を営む相原家ののだや、八弥亭もそういった風情を感じさせたが、かつて海で遭難し負傷したデアアナ号の船員たちも、ここに長く逗留した。当地の首長である葦山代官江川英敏は、被災したロシア人たちに礼拝等の宗教活動を特別に許し、これがそののちの明治期、ハリストス正教会が建立される礎となるのである。

伊豆に入ったワレンロードの懸念は、予定日を過ぎてもスズダリ号がシモダに現れないことであった。

(一体どうしたというのだ。何日も好天に恵まれていたではないか。)

勿論デアアナ号の時のような、地震も津波も起きてはいない。

再度下田へ行こうか思案していると、伊豆西岸の安良里、宇久須あたりで不気味な外国船が現れて、騒ぎに

なっているという噂話が流れてきた。

「黒船が来た。黒船が来たあ——っ。」

ワレンロードは直感した。戸田だ。理由は判らぬが、船は戸田港へ向かっている。

「げんど、おろしやの黒船は白いずら。」

急峻な山を迂回し、三里程の小径を行くと、ぐるりを山に囲まれ、たつぷり水深のある茶壺を沈めた形の戸田港が見えた。成程、天然の良港だ。

円型の内海の中心には確かにスズダリ号がその鈍色を光らせて停泊していた。思わず彼は胸を撫で下ろした。

海軍少佐ステイエバン・ドージュエはワレンロードと対照的な中背の恰幅のよい風体をしていた。阿蘭陀人を思わせる縮れた紅毛が眼をひく。

「ご心配お懸けしました。大佐、シモダが閉港したと知らせが入ったのです。アメリカ国のハリス領事が他国の足踏みをよいことに、今度もひと足先に日本国と通商を締結し交易を始めると。」

そのタウンゼント・ハリス殿だが、条約締結の督促に躍起となっているものの、相方の江戸幕府は相変わらずのらりくらりの印度調小夜曲(牧歌的に進むとえ)では簡単には行くまい。痺れを切らせたハリス殿は暇を持て余す間、下田柿崎村で、土地育ちのオキチという名の麗人に熱を上げているというではないか。

ドージェ君、下田閉港云々の噂は君の早合点だったよ
うだな。

ワレンロードは自分の馬にドージェを乗せると、修禪
寺へと達磨山の草原を一気に走った。戸田港のスーズダ
リ号には、最低限の物資補給を終え次第出港するよう命
じた。

当面の居所を修禪寺村としたのは、ディアナ号の件の
返礼として彼が葦山代官を訪ねた際に奨められたことも
あるが、自分自身、今後の動向を占う意味でも、この土
地は最適と判断したのだった。

ペリイが本国に帰って下田港の美点を力説したとい
うのは本のだが、それは生来の軍人としての観点からで
あった。新たに着任したハリスは経済感覚に優れた商売
人である。当然帝都江戸の近くに、利便性を見込める港
湾を整備すべしと、それはフランスもイギリスも鎖国期
においてさえ国交を続けたオランダも、ロシア国駐日領
事となったワレンロードも考えは同じであった。

最有力候補は横浜以外あり得ず、各国は東海道神奈川
宿に領事部を設けるべく、その準備が進められた。一方
太平の眠りを貧ることに馴れていたわが国はというと、
外国勢の機敏な動きについてゆけず、心情的には外様大
名以上の厄介者は、そのまま僻地下田に居て貰いたかつ

た。

ドージェの勇み足で一頓座あったが、このち下田は
暫定貿易港の役目を終え、もとの漁港へと姿を戻す。

伊豆の中心に位置する修禪寺は江戸への前進基地とし
て最適と考えられた。ワレンロードは代官所へ証書を提
出するにあたり、居留目的として海軍少佐ステイエバン
・ドージェを陸上での業務に馴れさせる為と付記してお
いた。

ドージェ君、長旅ご苦労。この宿の下の川原には、
君達が四十人入浴できる風呂があるから疲れをとるとい
い。

桂川の溪谷の真っ只中に独鈷とくこの湯があった。平氏に遠
流された源頼朝や、後継争いに奔走した頼家、実朝が英
氣を養ったのもこの湯である。川底から熱い湯が湧き出
し、川の水に混じって風呂が出来ている。腰や患部を直
接噴湯部に当てて治療するのである。ワレンロードや
ドージェが彼らの広大な故国を何十回走り回っても捜せ
そうにない代物しろものであった。

風呂から上がったドージェは、今度は馳走として用
意された御狩場焼に目を白黒させる羽目となった。全く
どこから手をつけて食べたらいいか見当がつかぬので
ある。

君にはこれから陸上生活に親しんで貰わなくてはな

らないからな。これはその意味での郷土料理だ。昔から源氏のサムライたちも行動食として来たのだし、君もいずれ退官して、故郷で鹿狩でもするときに役立つだろうと思つてな。——ところでドージェ君、出身はどこだね。〃

〃私：……………今はポーランド領となっているシャーツクの出身であります。〃

ワレンロードは目を丸くした。

〃シャーツク、その町の近くに湖はなかつたかね。〃

〃ありました。大伯父に連れられてよく歩きました。〃

歌つたシビテージの湖だ

幾度かの戦火に塗れ、人々の

魂は湖のほとりに集い、一つ一つが

水仙の花となりて、語るには……………

〃そうかそうか、君はシビテージの湖の近くの生まれであつたか、いやあ済まん。総帥から君のことを伝えられたとき、南欧調の名字だと感じたものでな。ローマだつたかベネチアだつたかカトリックの最高位職がドージェというのだよ。〃

〃そうなのですか。実をいうと私の出自は不明なのです。生父母の記憶もありません。私を育ててくれた大伯

父も亡くなつて、それで海軍に入隊したのです。〃

〃それなら私も似たようなものだ。生まれはカリリーンだ。歴とした普魯西人だよ。父も母もカトリックで幼少の頃はイグナチウスの教会に行ったものだ。家族は皆戦争で死んだ。こんな苦しみはもう味わいたくないこの歳まで独身でいる。

だがな、吾らのように雑多な民族が集まり、ロシアは構築されている。これは事実なのだ。〃

翌朝、河原の露天風呂でひとりドージェが湯浴みをしていると、手拭を肩にワレンロードが下りてきた。

〃日本の温泉はどうだね。気に入つたろう。だが吾々もそう悠長にはしていられんのだ。他の国に再び遅れをとつて了うからな。〃

〃大佐、いえ、領事、昨晚申し伝えるべきでしたが、領事部設置に帯同する、ナガサキ（長崎）藩士の千々石……………。〃

〃サムライか。通訳兼庶務係でやれそうか。〃

〃おそろしく賢い男です。以前より寧波方面へ漂流した領民の帰還を進めるべく、わがロシアとも接していたともいいますし……………。〃

〃頼もしい男ではないか。〃

〃ですが、気になる点が……………。〃

「どうした、君の友人なのだろう。」

「確かに今後、国交樹立の恩恵で発展の見込める地域の予測には目を見張るものがありますが、それらの都市寧波や大連、更にはわが国のウラジオストクに婦女子を派遣する計画を暗に進めているという噂もあります。」

「よもや、あのカメラヤマ社製検・梅鏡の開発者も。」

「彼です。あの製品で相当の利益が出ている筈です。」

「成程なあ。サカモト（竜馬）殿の活躍に陰の功労者がいたとはな。だが全く問題はないぞ、ドージェ君。人間、何時いかなる時も心身健康でなくてはいかん。当然飾り窓の麗人たちも同じこと。ガスパージン・リチヂワが行おうとしているのは、遊女を徹底管理の下で働かせ、正常な社会機能を展開させることなのだ。」

少し下流の方でもうひとり湯浴みをする人影が見えた。

噴泉口が吐き出す霧がすみで姿をうまく隠していたが、二人の会話が聞きとれる所まで歩み寄っていた。

吃驚したドージェが大声をあげた。

「彼が千々石同心殿であります。」

初見参の挨拶が風呂場というのも不思議な印象を与えたが、ワレンロードの信用を得る為に千々石がとった咄嗟の判断だった。

千々石殿、貴君も日本の侍であるのなら、源氏三代、

そして頼朝の父、義朝も着衣を解き、油断した折を急襲され絶命したことを存知ていよう。」

「誠に失礼仕り候、お許しを下さらんことを。」

年恰好はドージェと同じ位であろうか。一見華奢な地侍風だが知識に長じた壮士らしく、控え目な口振りに見え隠れる矜持をワレンロードは見逃さなかった。

千々石殿が来たということは、領事館の候補地があったということかな。よもや根回しが済んで、私たちが驚かすつもりではないだろう。」

「そのことですが、三人だけの場を設けて頂きたい。」
それを聞いたワレンロードは一計を案じた。

「この修禪寺村を発つ前に、ドージェ君にも一度見せておきたいと考えていたところだ。」話がまとまり三人がやって来たのは天城峠に続く村外れ、何時ぞやワレンロードが愛でた一面錦繡の紅葉美林であった。

「密約秘談を戸外で行うのもロシア流なのですか。」

「そんなことはありませんよ。」

ドージェが照れ笑いを浮かべ乍ら千々石に眼を合わせた。

「ロシアの夏は短い。白樺が黄葉しはじめると瞬く間に冬がくる。私もそうだがロシア人は、消えわびぬ移ろいを、白樺の黄葉の中に、落着き、恥じらい、たおやかさといった情緒を見つけてきたのだ。」

この森には私が見慣れた黄色は存在しない。この鮮やかな赤色こそが日本の民衆を心底感動させ、和歌や謡曲、屏風に描かれた絵画に至るまで、人々の生きる糧となっていることに気がついた。紛れもなく、われわれと同じ感性をこの国の人々は持っている。

いやあ、素晴らしい。紅葉の最高傑作です。この国に生まれ育ち乍ら、これ程美しいもみじは初めて見ます。

疾風に驚いた馬たちが交互に嘶きだした。

さてと、千々石君、私はのんびりと湯治をしていた訳ではないのだ。江戸の幕府が各国の領事館を神奈川の宿場域内に造らせる計画でいるのを、果してハリス殿、オールコック殿がどう臨むか、一歩下がって見ていたのだ。彼等皆横浜の港湾近くに領事館を建てたい筈だからな。

そこで私は旧知の加留部青兵衛に話をしました。加留部は神奈川宿の次、保土ヶ谷宿において本陣金子屋をもつ長者です。保土ヶ谷は金沢脇街道を分ける交通の要所で、ペリイ提督が軍艦を入港させた浦賀へ行くのにも、ここが基点となります。加留部が檀家となる修験道寺ではロシア国領事館設置に向け、尽力くださるそうです。

話がそこまで進んでいるのであれば、引き続き君に任せよう。

千々石同心は颯爽と馬を走らせ、去っていった。

見事な仕事ぶり、という他ないが、ドージェ君は彼をどう見る。

私も彼を「二心無し」と見ています。

「二心」「無し」か。どうやら君も、日本人の精神論の核心に近づいたといえるなあ。

彼らの故国ロシアは、中世よりウラル背嶺を中心に、欧亜両方に腕を伸ばす国ではあったが、首都は欧州寄りに位置し、東方ではモンゴルやタタールといった遊牧民国家との関係に火種を抱えていた。十七世紀にイエルマークがシベリアに侵攻し、異民族の軛がとり払われると以来、領土拡大の勢いは留まることなく、十九世紀初頭には東察加を越え、北米大陸に喰い込むところまできていた。

この間、シベリアの原住民から毛皮税を取り立てる方法で、広大な領地を治め、黒貂などは絶滅する迄獲得された。勢力を、アレウト、クリル（千島）の島々に移すと、今度は狩猟の対象を海獺に変えた。当時クリル北方諸島に定住していた原住民が莫大な毛皮税を課せられたのはいうまでもない。

片腕だけが肥大して、歪なシオマネキ蟹のようになってしまったロシアの緊急課題は、首都から離れた極東地域において交易の拠点をもつことであつた。奇しくも欧

米列強は拏つて、鎖国日本の固い門を抉じ開けにかかっている。

ワレンロード、ドージェ兩名は先発した千々石同心の後を追って東進を開始した。普通は三島大社にて東海道に合流、そして箱根の山を越えるのが正規の行路だが、ワレンロードは修禪寺から真東へ進む亀石峠越えを選んだ。ここは冷川峠と共に伊豆の山々が最も低くなる所で、高さも箱根峠の半分以下でしかない。

多賀村では今度はドージェが海軍少佐らしさを発揮した。手際よく石材運搬船を見つけると直ちに船主に話をつけ、自分達を藤沢弁財天まで便乗移送の交渉をすませたのである。こうして二人は保土ヶ谷宿に到着した。

公務室として当てがわれた十二畳ほどの客間には一枚の絵が飾られていた。先のペリイ提督の浦賀来港を描いたもので、点描にどことなく風刺が込められていた。

「これは千々石さんが掛けていったそうです。」

実に心和む絵だ。ペリイ殿の黒船が来たというのに日本の子供達は喜んでるようにさえ見える。

「この子供達は、男の子はサスケ、女の子はハナという名だそうで、この国ではありふれた名だといいます。」

「サスケ君とハナちゃんか。わが国のサーシャとミーシャみたいなものだな。それにしても子供達の笑顔の脇

でペリイ殿の船の何と小さいことか。ドージェ君、虫眼鏡を持って来ないと詳しく観察できないぞ。私にはペリイ殿が空に向かつて豆鉄砲を撃っているようにも見えるが、わっはっは。」

ワレンロードがすっかり上機嫌になつていると、母屋で邸宅の主人と話をしていたドージェが大きな声で、千々石の到着した旨を告げた。

「神田駿河台にあります作事奉行岩瀬忠震屋敷へ行つてまいりました。条約締結の準備は進んでおりますが、

詳細日時は「暫し沙汰をお待ち候え」ということですね。どうやら神奈川宿の浄瀧寺にて領事館を設立したイギリス国に先を越されてしまいましたね。慶運寺のフランス国領事館も調印を待つだけの段階といえますし、岩瀬奉行の「神奈川ののち保土ヶ谷へ」の意味が判りましたよ。

隣で周囲の動静を窺っていたドージェは苦虫を噛んだ顔をした。(クリミヤ戦争に続き今回もわれわれは英仏連合の前に劣勢とならざるを得ないのか)と。

そんな中でワレンロードは保土ヶ谷到着以後、のんびりと構えている様子である。

「さすがは江戸に近い東海道筋だけのことはある。修禪寺村と比べものにならない程の賑わいだ。」

大切な行事を前に悠然とする彼に、ドージェも千々石もどう対応すればよいのか理解できずにいた。

「これはオランダ語の新聞ではないか。」

知っている単語を繋いで読んでみようとするが、全く訳した文が意味をなさず、前後関係からクリミアの戦いで活躍した英国人看護婦フロレンス・ナイチンゲールの記事らしいことだけが判った。

「千々石君、何て書いてあるのだね。」

「これはフロレンス女史の新たな勤務地での失態ぶりを批判した内容の記事です。見出しに「小夜啼鳥、カルカタでは囁らず。土人と目が合い職場放棄」とあります。彼女はクリミアの戦地で、敵であるわれわれロシア人をも差別せずに介抱してくれたものだ。感謝している。」

「それなら私が解説します。」

「ドージェが目玉を丸くして喋り始めた。」

「私の艦は何度もドラビダ地方に寄港したことがあるのですが、カルカタのある印度東部の土人というのは肌の色もどす黒くて、頬骨領脚も迫り上がっていますし、それはもう、半魚人のようです。いえ、口が過ぎました。ですからフロレンスさんでなくとも乙女ならば逃げ出したくなるのも仕方ないことかと……。」

ワレンロードは黙って新聞に見入っていると、隣の千々石が付け加えた。

「退廃したドラビダの地では、百年になっても土人を介抱する看護婦など現れないであろうと、そのように書いてあるのですよ。」

ドージェが納得して覗いているとワレンロードが静かな口調乍ら思いがけず反論した。

「そう思うか。そういいきれぬのか。穢れ無き聖童女アグネスのごとき献身的な女性が、百年の後にもドラビダの地には現れはしないと、どうして言えようか。」

私はかつてプチャーチン総帥の乗ったディアナ号の難破の知らせを受けた際も、何とか無事に上陸できれば、この国の人は救助してくれるだろうという確信があった。何故なら二百年前、カズサ（上総）の海で西班牙船が同様の海難事故に遭った時も、船員たちは住民に救われている。」

「フランシスコ号とロドリゴ艦長のことを言っているのですね。」

千々石同心はおだやかな笑みをもって彼を見た。

「そうだ。大昔に、外国船が経験した不幸中の幸い、この事故があったからこそ、私はこの国を信ずることができた。」

凧が吹きつけているのか、けたたましく軒を叩く音がする。明後日には極月（十二月）だ。しかしワレンロード達の素振りからは冬の訪れを意識する様子など全く感

じられなかった。

◦今頃は修禪寺村の紅葉林もすべて葉を落としている頃でしょうね。この辺りも、じき霜柱が立つでしょう。

ドージェさんは日本の冬など寒さのうちに入らないのではないですか。

ロシアの諺に「氷点下四十度は寒さに非ず」というのがある。千々石は長崎で知ったロシア人から聞いていた。他にも「アルコール四十度は酒に非ず」「四百軒は距離に非ず」と言うらしい。千々石は続けた。

◦ここから三里程のところに武州有馬薬湯という、執権北条時頼ゆかりの湯があるのですが、風も冷えてきたことですし、明日あたりいかがでしょう。

◦ホウジヨウというのは、城の開け渡しに長い議論を重ねたという、オダワラの城主でありますか。

興味深げに、ドージェが質問した。

◦違いますよ、それは後北条のことです。源氏に代わって鎌倉を治めた、北条得宗家の五代時頼が刀傷を癒したというものです。

ドージェさんも日本国の歴史にだいぶ詳しくなられましたね。それに温泉が気に入られたようで……。

二人のやりとりを黙って聞いていたワレンロードは、小田原評定の話に一度苦笑いを見せただけで、あとは割って入ろうとはしなかった。

千々石が帰った深夜、ワレンロードは眠れずにいた。

◦ドージェ君、君も眠れないのか。

◦なんだか気になって了って。私達にとつて最も大事な仕事が進んで来たんだと思うと、緊張します。

◦条約締結はことの始まりに過ぎんよ。国交が順調に進めばわれわれは事務処理やら多忙に追い捲られる立場となる。長ながと湯に浸かることもできなくなる。

◦それは残念です。

武州有馬薬湯は田圃の中に簡素な掘建て小屋があるだけの共同浴場だった。千々石に促され、二人は手狭な脱衣所に入ってゆく。その時千々石の左腕から何かが音を立てて床に落ちた。瑠璃石の祈念珠だった。

◦これは先祖より伝わるものです。私の先祖は松浦水軍に所属していたといえますし、交易相手の宋の商人あたりから贈られたものではないかと考えています。でも祈念珠にしては短すぎるので、恐らく半分に切れてしまったものなのでしょう。

話を伺っていたワレンロードはどうにも解せないでいた。何故なら彼自身、子供の頃故郷のカリーニンにて父親から、これとよく似た片割れの祈念珠を見せて貰ったことがあったのだ。その後軍人となり、自身が所持して

いては大切な形見が遺失する危険も伴うので、持ち出すことはせず、今も家族の墓所に一緒においてある筈なのだ。

彼の父は、ワレンロード家が十字軍に兵を出していた時代、長子ゲオルギワレンロード一世は、激戦地へと向かう末弟コンラッドの武運を願ひ、祈念珠の片方を手渡したというものらしい。いつの日にか必ずや兄弟が再会叶う様に…………。

千々石とドージェは湯浴みし乍ら話を続けていた。

私は海軍出身ですが、ロシアには港湾都市が少なく、てねえ、大陸を流れる川が皆北へ向かっているでしょう。詰まるところ、西のリエパーヤ、東のウラジオストク、この二つだけなのです。

千々石さんのご先祖がいた水軍の他にも、日本各地に海上を統治する水軍があった訳でしょう。私の上司が、中世のマルタ騎士団のように合理的な小規模都市国家を形成したと言っていました。

その通りです。松浦以外にも塩飽、村上などの水軍が活躍していました。それらは単なる軍隊としてだけでなく、自主的に散賤（のちに高利貸しに発展する初歩的な金融行為）もやっていたといえますから、ワレンロード領事はそのことを指しているのでしょう。

私など博学でもありませんし、軍人にならなかつた

ら郷里で牧夫をやっていた程度でしょうから。

楽しそうな二人とは対照的にワレンロードは熱湯の流入口近くで、しかも一面をして独り言を漏らしていた。

（千々石君、一体君は何者なのだ。南蛮渡来の直後にこの国からバチカン総本山に派遣された使節の中に、君と同じ姓があったと思うのだが……………気のせいだろうか。）

仏頂面をしていたワレンロードに千々石が声をかけた。

領事は、長崎から馬に乗って陸路を行進されましたね。もしかやそれはわが国古来の、神武東征のことが念頭にあったからではありませんか。

その通りだ。私はこの国で外交官としての職務につく前に知っておきたいことがあったのだ。

あなたは伊豆に入る前、※撰津の大物浦、※洞ヶ峠、関ヶ原を訪れましたね。私は初め、あなたがイエルマーと称されるように、わが国に領土的野心をお持ちなのはと、猜疑の眼をもつて見ていました。されど同じ道筋を辿って伊豆に着いた時、あたかも文人墨客がするように、一瞬の時の中に永遠の感動を得ているのだと判りました。どうかお許しを。

いや、謝る必要はない。それに私は、只感激していただけない。大切なのは物事を見極めることだ。

ドージェ君はクリル諸島に駐留していたから知ってい

ようが、異常ともいえる武装、あれは何に備えてのものか!!

ドージェは答えられずにいた。

松前藩はおろか國中捜せど、この二百年、日本国において他国を攻撃する軍力など存在しなかったのだよ。われわれは襲ってくるのではない者の為に戦費を無駄遣いしていたのだ。

この国は長い間外交を閉ざして来たが、結果として外部情報を国内にいれないことはできたが、国内のできごととは外国へは筒抜けとなった。つまり国策として、外国交易が不可能な小型船のみを用いて能力以上の海運を行うことで数百人単位で漂流民を出した。いまでは白鹿兎湖畔に日本からの漂流民の村が出来ている。

※クドウ氏、※カツラガワ氏の著作ではロシアを紹介した内容のものだが、そんなものまで再び露訳され、私は読むことが出来たのだ。

ドージェ君、修禪寺相原亭の客間に木製の人形が飾ってあったのを覚えているかね。

ええ、確か円筒形の、頭の平たい人形でした。

あれはコケシという日本の伝統工芸品だが、何か連想しないか。

まさか。

そのまさかだよ。わが国で子供達が大喜びの、

魯西亞人形はコケシをモデルに造られたものなのだ。尤も日本のコケシには何も入っていないがね。

ゲオルギーワレンロード、ステイエバンロード、両名は、江戸領内神田駿河台の作事奉行岩瀬忠震郎を訪い、首尾よく条約の調印を済ませ保土ヶ谷へ戻るところであつたが、とりわけドージェは事の成り行きに納得してはいなかつた。ロシア国が日本国内に設置する領事館は一ヶ所「箱館」と決まつたからである。

どうして保土ヶ谷と箱館の二ヶ所とならぬのでしょうか。さすればわがロシアは、他国よりも日本国とより高義なる繋がりをもてましたのに。

ドージェ君、それは理想論だよ。実利第一と考えれば領事館がわが国寄りとなるのは結構なことだ。そこで新たに全権大使となるのは、君なのだよ。

箱館はイギリスのパークス公使がジブラルタル要塞にたとえた程の軍港としても最適なところで、私も寄港のつど風景の美しさに歓声をあげたものです……。ワレンロード領事はどうなのです。日露兩國の為に尽力されて来たというのに。

千々石君も言っていたではないか。私には野心などない。もう若くはないのだし、軍人としても退官する。

郷里に帰るよ。以前から欲しかった「大日本史」の写本

が手に入りそうなのだ。帰国したらロシア語に翻訳する。それだけではない。私なりに己の国の史書を編纂する構想をもっている。表題は黄門御老公に肖つて「大欧露史」とでもしておこうか。

ワレンロードの帰国、ドージェの箱館転任、ともに日時も決まり、寸暇を惜しむ彼等は修禪寺村で過ごすことにした。二人が到着した晩、折りから村は薪能の催しで賑わいを見せていて、相原家主人の奨めもあつて物見遊山の客となつた。その日の三番叟は義太夫浄瑠璃が登場し、源左金吾頼家の怨念と、その仮面づくりに生涯を捧じた面打師夜叉王を謡いあげていた。

初めて眼にした古典芸能にドージェは全く落ち着かぬ素振りであったが、出し物が終わると微かな感銘を受けたようである。

面打師の娘二人の名は「楓」と「桂」でした。それらはこの向うの山を美しく彩つた樹木の名ではないですか。

穏やかな小春日和を桂川の露天風呂で憩うなどして英気を養い、再び保土ヶ谷の加留部別邸にてワレンロードより正式に駐日領事の職を引き継いだドージェは不幸にも箱館へ出帆を三日後に控えた日の朝、帰らぬ人となつた。前年あたりから猛威をふるい、日本全土を恐怖に陥

れたコロリと呼ばれる疾病の為であつた。

ステイバンロードージェは横浜港を遠くに見渡せる石川町山手の外国人専用墓地に葬られた。葬儀を終え、憔悴したワレンロードはそこにもうひとり弔問者がいるの気がついた。

千々石君、来てくれたのか。皮肉なものだな。私より若く、あんなに剛壮だったドージェが病死してつたのだからな。

千々石同心はワレンロードの手にあるものを見つめていた。

彼の遺髪だ。見てくれよ。真つ赤だ。異国での不馴れな生活の中で、よく働いてくれた。私を補佐してくれたこれはせめてもの感謝のつもりなのだ。

源義経が戦死した家臣の遺髪を故郷に届けた話を思い出したよ。ドージェ君のふるさととはポーランドだが家族はいないそうさ。まあ懸命に捜せば親類縁者くらいは見つかるだろう。それにしても彼の髪は太く縮れているからこよりで束ねるにも、日本の侍のようにはいかぬのだ。

殊勝なお考えですよ。ワレンロードさん。

箱館の駐日領事として新たにゴシケピッチが派遣され、ワレンロードは本国召還、暫くは大連にて外務顧問の職

に就いていたが、日本とロシアの両国が良好な関係でいられたのは最初だけであった。やがては満州鉄道を挟んで睨み合う仇敵となり、日本海海戦へと突入して行く。

ロシアは国内でも政策が暗礁に乗りあがる。摸索する国家情勢の中で、頭角を現すのは左派労働党である。不安定な国際関係の枠組みの中に、またひとつ保守的の共產主義国家ソ連が加わった。

ワレンロードの実績は新国家においても十分に賞賛に値するものであったが、国の将来像を推し測ることすら出来ずにいる新しい権力者達にとって、彼は眼の上の瘤にしかなり得なかつた。それで官憲に捕縛され、クリミア半島バクチサライにて軟禁となつたのである。何の因果か、そこはかつて彼が陸軍大佐として戦勝の功績をあげた土地であつた。

長い幽閉生活ののち、軟禁が解かれたとき、ワレンロードは卒寿の高齢に達していた。

クリミア半島はウクライナ南部に位置する。そして彼がどうしても訪れておきたい町、ドージェの故郷シャーツクがソ連領ウクライナ共和国に編入されたのは幸運といえた。先ずポーランド国境に近いリボフへ行き、シャーツクへは、毎晩深夜一時に郵便局の前を出発する郵便馬車に便乗するのが確実だと教わり、ひたすら真っ暗闇の街頭で時を待った。

午前一時の発車時刻が近づくと、郵便局の建物に歌々と明かりが点り、それまでの寂寞が信じられぬ位、何処に潜んでいたのかと思われる人集りができあがつた。旅客相手の物売りや、なかでもいちばん大声を発するのは蒸留酒を配分する好々爺たち。

「こゝろあ、幾らでも飲みな、」

ウオッカより強いズブロッカだつてあるよ。

終いには馬車を見送りに来たのか三角琴を奏でるロマ二楽団まで現れた。

ワレンロードは瘦葉林に囲まれた湖のほとりに立っていた。詩歌にも謳われたシュビテジの湖である。

「ドージェ君、私はシャーツクに来て三日になるが、いまだに親戚どころか君のことを知る人物に出会えないでいるのだよ。」

国そのものが変わり果て、自らは因われの身となつた。その期間を取り返しのかかぬ程長いもののように思われた。湖畔を見渡せば可憐な水仙の花たちが無口な表情を見せているだけである。「星霜を書きとどめ、時空の語り部となる」と叙事詩に登場する、あの花だ。

途方に暮れ、身を横たえようと、それまで老体に鞭打ち続けた反動か、深い眠りに吸い込まれていった。

夢を見ているのだろうか。彼の眼前に広がる光景は、どう見ても湖底のものと思われた。(思い出したぞ。シユビテジの妖精は湖底に棲んでいるのだったな。ならばステイエバン・ドージエのことも承知しよう。尋ねてみるとするか。)

周囲を見廻し、かすかに光芒を發する方向を見つけると念誦をこころみた。矢張り妖精に話しかけるなど無駄な行為であったか、と諦めかけたとき、彼の面前に人影が現れた。ワレンロードは思わず凝視した。

「おお千々石君か、どうして君が……、私は夢を見ているのだ。」

「夢ではありません。私はいまあなたの意識下に語りかけています。湖の精は実体ではなく現象なのです。夢ではないことを証明しましょう。映像として、何か見えて来ませんか。」

聞こえてくる声に続き、懐かしい風景が彼の目を奪った。

「修禪寺村の景色ではないか。」

こんこんと桂川に湧く露天風呂、錦繡に染まった紅葉の山、薪能に誘う門前の狐火、長いこと記憶の奥底に追いやっていた思い出が走馬灯となって再現した。だが一つだけ見馴れないものがあつた。それは彼が修禪寺村では見ることのなかつたロシア風建築の教会堂である。

「私はあれから箱館に移りましたが、領事館がハリストス教会内に設けられた関係で、それからというものニコラエ司教専属の通訳として働いています。」

憶えておいでですか。相原家さんも、のだやの八弥さんも、病いに臥した司教の恢復を願つて修禪寺の地に正教会を建てて下さつたのですよ。」

再会を喜び合うゲオルギ・ワレンロードと千々石同心の、互いの容姿が湖底の光芒のいたずらのせいか、少しずつ変化しはじめた。

「おおつ、わが末弟コンラッド・ワレンロード、千々石同心はその末裔であつたのだな。」

声の主ゲオルギ・ワレンロード一世であつた。

「兄さん、待つていてくれたのですね。私はアテナの街を自分の同胞が破壊したと知り、絶望し、それからはベツレヘムへも行かず、只只陽の昇る方角へと向かい続けました。何ヶ月もたち陸路の終わるところ、寧波という町で松浦水軍兵と知り合い、その後千々石家の養子となつたのです。」

「うーむ、正に祈念珠のなせる奇跡だ。」

我に返つたワレンロードが濁つた水を吐き出し、跪くように水面へ顔を伸ばすと、水仙の咲く傍らに千々石同心は佇んでいた。

夢ではなかつたのだな。遠い昔、生き別れた末弟を捜す為、ワレンロード家では歴代の嫡子にゲオルギの名を与えてきたそう。子供の頃はあまりに実感のしない話に、自分が何代目にあたるのか親父に尋ねたこともなかった。私は生涯独身をとおしたから家系は途絶える。

だが末弟コンラッドは遙か日本の地にて子孫千々石同心と再会が叶うた。もう思い残すことはない。両親やドージェのいる安楽の地に旅立てる……。いや違う。私は故郷カリニンへ帰らなくてはならぬ。片割れの祈念珠を千々石君に託し、ひとつに繋げなくてはならぬのだ。

そこに立っていた筈の千々石同心はやはり幻であったのだろうか。湖面に立ちこめる霧に消えて了うのか、すっかり気配を薄くしていた。

千々石君、聞こえるか。どんなに時間がかかろうと君のもとへ片割れの祈念珠を届けに行くからな。

その頃には江戸と伊豆の間を汽車が走っているかも知れぬ。もう馬を使わなくてもよいだろう。

夕刻が迫っているのか霧は更に濃くなった。

おおい千々石君、それからこれは私の発案なんだが、修禅寺村の美しい風景を観光客が楽しめるように、山に鋼索鉄道をかけるといふのはどうだ。当然客を運ぶ二基

のゴンドラには新能に登場した夜叉王の娘の名をつける。「楓」と「桂」だ。面白い発想だろう。それでは皆に宜しく伝えてくれるい。

湖が闇に包まれるまで、ワレンロードは独りではしゃいでいた。千々石同心の残像はその姿を消す最後の一瞬まで彼をずっと見守っていた。(了)

※解説

クリル第二十島 〓 ロシアでは千島列島をクリル諸島と呼んでいた。第二十島はクナシリ島、第二十二島は北海道、松前藩ではこ

れらをロシアの領土的野心と疑った。

撰津の大物浦 〓 源義経主従が平氏討伐に出発した港。

洞ヶ峠 〓 筒井順慶が明智方を裏切り豊臣に寝返ったとされる物見をした峠。

クドウ氏 〓 工藤平助著「赤蝦夷風説考」江戸時代にロ

シアについて詳しく書かれた本。

カツラガワ氏 〓 「北檜聞略」桂川甫周著、大國屋光太

夫からの伝聞を著した本。